

肥後歴史散歩

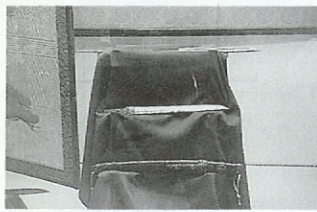
南朝の雄 菊池氏



●聖護寺
静寂な山中に行む聖護寺。開山した大智禪師には「中国人僧と日本人僧とが共に修行のできる道場を創設する」夢があったという。いま聖護寺は、米国から修行僧がやってきたりと、国際的な禅道場となっている。



●菊池神社
十二代武時、十三代武重、十五代武光が祀られ、境内の歴史館には菊池氏ゆかりの歴史資料、郷土の文化資料が展示されている。博多の北条探題邸に討って戦死した武時の三男頼隆の碑、菊池十八外城方位碑など一族を語る数々の記念碑・史跡が点在している。



に隣国の大友氏が肥後国守護の職を入手。菊池氏本宗は滅亡の途をたどることになる。

武朝勸請の北宮

菊池一族の最初の本拠地は、初代則隆が居を構えた深川である。現在、館跡は田んぼの中で、石碑と解説板が立っているのみである。この深川城から数百メートル上流の菊池川川べりに北宮神社がある。天授四年（一三七八年）十七代武朝が、阿蘇北宮（阿蘇十二神の第十一神国造神）を勸請。氏神としたと伝えられる。ここには武朝を大願主とし、一族の男女を願主とした十体の男女神坐像が納められている。新しく創建する氏神と共に一族の祖霊を祀ることに、南北朝争乱の中で揺いだ宗家の立場を明確にしたい、という武朝の想いがあったのではないだろうか。大願主武朝の銘が、その願いを物語っている。

聖護寺と大智禪師

菊池川水系追間川の上流にある風儀山聖護寺。ここは十三代菊池武重（父武時の説も）に招かれた曹洞宗大智禪師の開山とされる。武重は折りにふれ、事に応じて大智に禅道の教えを請いた。一族の法ともいべき「武重起請文（寄合衆内談のこと）」にもその教えが反映されており、一族の精神のよりどころであったという。一門が帰依していた大智は、十五代武光の時代には玉名の広福寺に移り、その後、聖護寺の動向は不明である。現在の聖護寺は昭和に入ってから再建されたものである。身も心も洗われる深山で、電気・ガス・電話など通わぬ中、今も六人の雲水が修行を続けている。

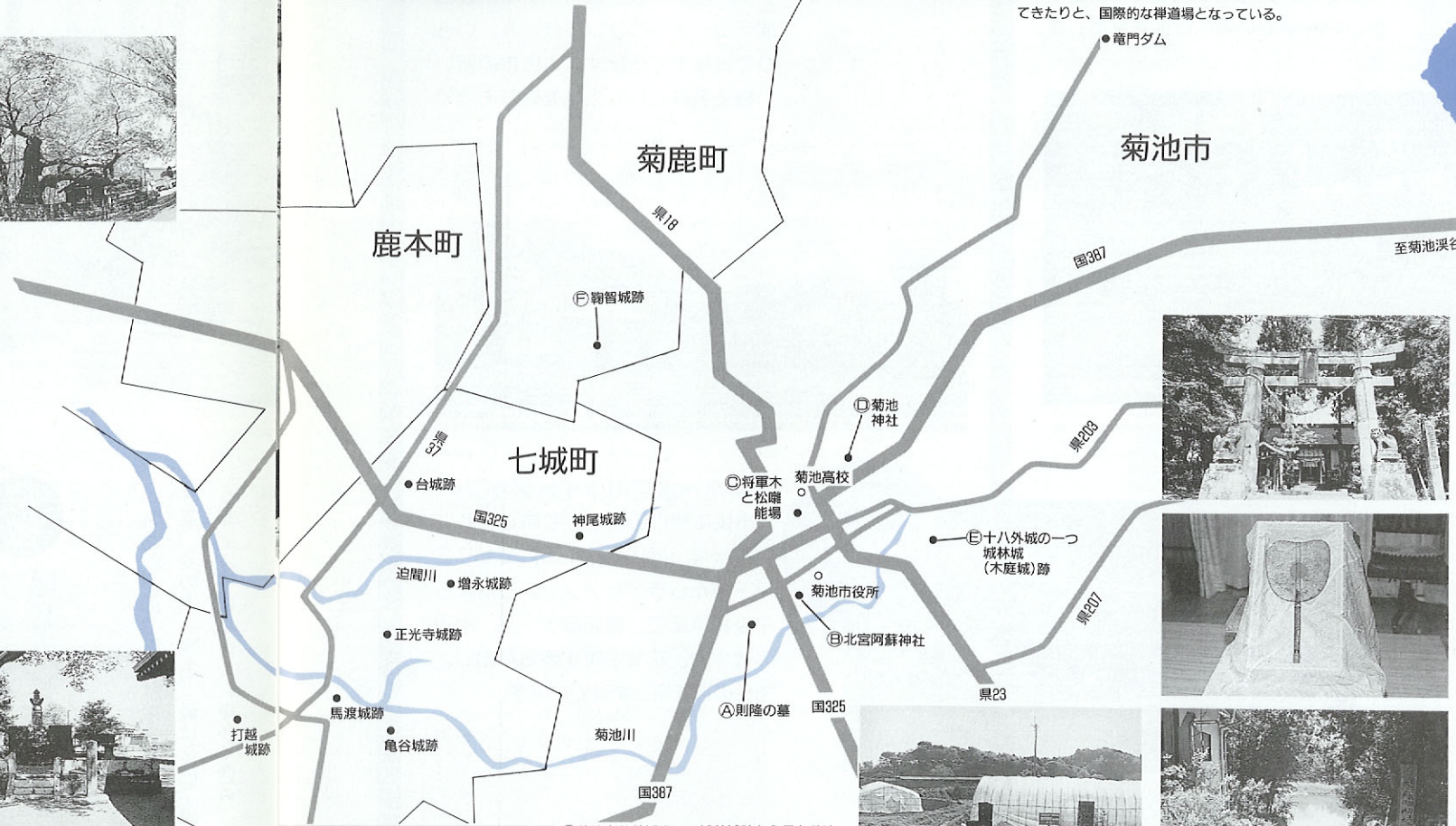
1019	藤原道長、太政大臣となる
1159	平治の乱おきる
1180	平清盛率兵
1182	壇ノ浦の戦い(平家滅亡)
1221	承久の変
1274	元寇(蒙古襲来)
1331	元弘の変
1333	鎌倉幕府滅ぶ
1335	足利尊氏、鎌倉で新田義貞と対立
1336	尊氏、光明天皇を擁立(北朝)、吉野(南朝)と対立
1338	尊氏、室町幕府を開く
1392	南北両朝合一
1467	応仁の乱(1477)
1555	川中島の戦い
1560	桶狭間の戦い
1573	室町幕府滅ぶ



●將軍木と御松崎子能場
県立菊池高校横にある樹齢六百年以上の椈の巨木。横良親王御手箱の木とも、宮の杖から芽をふいたともいわれる。將軍木の名も横良親王にちなんで名付けられた。道路向かいには、親王を隈府に迎え天下泰平を祈願して以来、六百数十年も続いているといわれる松崎子能の舞台がある。今でも毎年十月十三日の菊池神社秋まつりに、將軍木を親王に見立てて松崎子能や狂言が演じられている。



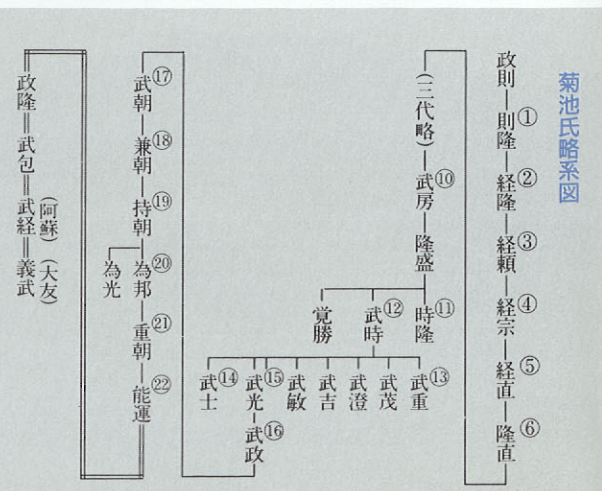
●菊池則隆の墓
菊池川に瀆された穀倉地帯一菊池平野の一角、深川。菊池氏は、この肥沃な大地と菊池川の水運を利用してその勢力を伸ばしていった。一族の祖則隆は、この一族発祥の地に眠っている。近くには「菊池」の名の元になったという「菊之池」、居城の跡「菊之城跡」などが点在している。



●高瀬
中世から近代まで菊池川の水運は重要な交通手段であり、河口の高瀬は水運交流の拠点の一つだった。菊池氏の一族は高瀬姓を名乗り、この地を支配、朝鮮半島や中国大陸の明朝とも交易をしていたとされる。



*1 勸請一神や仏の霊を移して祀ること。
*2 雲水一行脚僧



●北宮阿蘇神社
十七代武朝が勸請したと伝えられる。社宝に征西府將軍横良親王が奉納した軍配扇があり、菊池氏と南朝方との強い結びつきを示している。軍配扇と十体の男女神像座は県指定重要文化財。神社の前には菊池川が流れ、一族の刀洗場だったという。

●菊池十八外城の一つ城林城跡から見た菊池山城
寛政六年（一七九四年）に書かれた『菊池風土記』（波江公正著）に登場する伝承の城。菊池氏が本城の菊池城を守るため、十八の外城を築いたのだという。その一つ城林城からは菊池本城の姿が望め、防衛線としての十八外城の性格がうかがえる。また各々の城は一族の居城であり、城林城の主は戦氏である。

古代末（一〇〇〇年頃）から中世（一五八〇年頃）にかけて肥後の地で活躍した人々。その中に菊池氏、阿蘇氏、相良氏などの豪族がいます。肥後国人の彼らは動乱の中世をどのように生き、何を遺し、それらは今にどう受け継がれているのか……。彼らの足跡を訪ね、現代に残る中世の肥後国を見つけて歩く肥後歴史散歩。

今回は南北朝期、かたくななまでに南朝を支えて戦い抜いた菊池一族を訪ねます。

一族の興亡

肥後国菊池郡を本拠として栄えた武士団一菊池一族。その祖、則隆への系譜は、現在二つの説がある。一つは、太宰府の長官藤原隆家の孫であるとの説。今一つは、その隆家に仕えていた太宰府の高級役人政則の子であるという説。政則は、肥後国の宮人や郡司の地位を持つ肥後国人である。

いざにせよ、則隆が菊池深川に居を構えて以来、菊池姓を名乗り始めたのだという。

一族は、源平争乱の際平氏に従ったため、鎌倉幕府の世では処遇に恵まれない時代が続いた。建武新政が成ると肥後守となり、南北朝争乱においては九州南朝方の盟主として威勢を奮った。南北朝合一後、室町幕府体制下でも肥後国守護の地位を確保した菊池氏であるが、九州の政局の中心は築前（福岡県）に移り、九州を含めた中央政治に関与する機会は少なくなった。

国内では北肥後七郡の武士を統率下に入れ、領国支配の強化を図ったのだが、守護家の当主争いがあり、結果的